

信州総文祭出場！

総文祭親文

総文祭とは！

夏休み中、新聞部部長神林きらと副部長の奥山ちさととは、宮城県の代表の一員として、八月九日～十一日にかけて長野県で開かれた「第四十二回全国高等学校総合文化祭二〇一八信州総文祭」に参加してきた。総文祭とは、全国から各都道府県を代表する高校生が集結し、美術作品の展示や演劇・音楽の舞台発表などの芸術・文化を披露する、日本の高等学校の文化の祭典で、インターハイに対して文化部のインターハイとも呼ばれている。十九部門あるうち、私達が参加したのはもちろん新聞部門だ。

宮城県からは県工、古川学園高校、石巻高校の三校から二名ずつがこの新聞部門に参加した。一日目は顔合わせをした後、善光寺を見学し、たった小一時間ではあったが沢山の長野の魅力を感じることが出来た。総文祭の会場はHey! Say! JUMPのコンサートに使われる事もある場所の隣で、とても大きく綺麗だった。参加校の沢山の新聞が展示してあり勉強になった。二日目、三日目は色々な都道府県の高校生でグループ（五、六人一組）を組み、それぞれに提示されたテーマの元、取材や新聞作成を行った。



▲総文祭新聞部門の開会宣言の様子

発行日
2018. 9. 3
宮城県工業高等学校
新聞部

長野の魅力

総文祭に参加する前に、古川学園高校と石巻高校の方々と長野県を観光した。仙台駅から新幹線乗り継ぎながら長野県へ向かったため、少し疲れもあったが、長野駅を見た瞬間疲れが吹き飛んだ。長野駅の綺麗さに驚いたからだ。なかでも善光寺口は木材が使われていて、人の目を惹くデザインで興味深かった。その後は善光寺までバスで向かった。バスから見ると並みは京都のような雰囲気を感じられた。善光寺では、お参りをしたあとお戒壇巡りをした。それは本堂の地下へ進み、暗闇の中、「極楽のお錠前」を見つけて触れば願いが叶うというものだ。本堂の地下は本当に真っ暗で何も見えないため、壁を手でつたいながら進んだ。あまりの暗さに「お怪談り」とも言われている。私達は無事に錠前を発見することができたとともに、光があることに感謝した。



▲長野駅善光寺口



▲善光寺

た。時間制限があったため、みんなで協力しながら作業を進めた。その最中で自分の知識と力不足を痛感するとともに、沢山の事を学ぶ事が出来たのでとても有意義な時間になることができた。今回は、そんな三日間に経験したことを簡単に紹介していこうと思う。

（インテリア科二年 神林きら）

総文祭の流れ

一日目は、顔合わせとして交流会を行った。さまざまな県から集まった同じ新聞部の仲間たちと自己紹介をしあった。その後、クイズ大会が開催された。クイズの内容は開催県の長野に関するものだった。難しい問題もあったため、班のメンバーと協力して解くことで一気に団結力が深まった。その後は、二日目のコース取材に向けての編集会議。どのような方向性で取材をするか、どこにスポットを当てるかなど普段私たちが宮工親文を作るまでとレベルが違って驚いた。

飯山市の創作人形と飯山仏壇、奥山は飯綱町の高坂林檎と六次産業について、現地向かい取材した。長野のことはあまり知らなかったが、取材を通して奥深いところまで知ることができた。取材が終わると、即編集会議。交流新聞作成に向けて取材をまとめたり、新聞のレイアウトを決めたりした。私の班は編集会議が意見がぶつかり合い白熱していた。二日目のうちに記事を書き始める予定だったのだが、レイアウトすら終わらず、ホテルに着いてからLINEで連絡を取りながら、深夜まで作業をした。三日目は、交流新聞を完

てのコース取材。神林は、

編集後記

初めて総文祭に参加して、緊張もしたけれど、他県の高校生とも仲良くなれてとても楽しかった。また、校内の活動では得られない技術も手に入れたので、新聞部員として成長できたと思う。三日という短い時間で一つの新聞を作りあげたという達成感も得られた。普段の宮工親文は発行が遅れがちなので、今回の経験を活かしてなるべく早く発行できるようにしたい。さらに、得た技術を他の部員にも伝えて、部全体のレベルをあげていくので、これからの新聞部に注目してほしい。

（インテリア科二年 奥山ちさと）



▲奥山と神林の班が作った交流新聞

総文祭は堅苦しいものだと思っていたが、実際はみんな楽しく協力してやる和気藹々としたものだった。とても安心して取り組むことができた。三日間という短い期間の中で多くの人から様々なことを学ぶことができた。自分は、特に何も考えずなあと新聞を作っていたので、新聞を作るうえで気を付けなければいけないことなどを初めて知り、同時に自分の未熟さを痛感しました。この経験を活かし、これからの部活動にさらに力を入れ、全員でいい新聞を作っていきたいです！

（インテリア科二年 神林きら）

成に向けて写真を準備したり、各自ホテルで書いてきた記事をまとめて批評しあった。最終日も使える写真が少なかったりと苦労した。時間通りに完成はしなかったが、有意義な時間を過ごしたと思う。また、三日間を通しての新聞作りについて朝日新聞の記者の方に取材され、実際の新聞に掲載された。

今回の総文祭では、普段できないことが経験できた。交流新聞を作る中で自分のスキルアップにもなった。これらの経験を忘れずにこれからの部活に取り組みしたいと思う。

（インテリア科二年 奥山ちさと）